

135

福澤諭吉協会
2007年12月

福澤手帖
135
平成19年12月20日

〒
108-0073

東京都港区三田2丁目14番5フロイントウ三田五〇七 (社) 福澤諭吉協会

電話 〇三(三四五四)一九八五 yuki@axel.ocn.ne.jp

制作 慶應義塾大学出版会 印刷製本 三和印刷



『世界国尽』の挿図(香港)

ISSN-0912-6082

第四十二回福澤史蹟見学会

上州・信州の旅(上)

——富岡製糸場、神津牧場、佐久市神津邸——

服部禮次郎

I 今回の旅行のあらまし

福澤諭吉協会の国内史蹟見学旅行は、従来は二泊三日、または三泊四日の旅行が多かったのですが、今回は会員のみなさまができるだけ気軽に参加していただけるよう、一泊二日のバス旅行を企画しました。

行程はつぎのとおりでした。

平成十九年十月二十七日(土)、二十八日(日)

第一日(十月二十七日)

午前八時半、雨のなかを東京駅前集合、参加者二十五名。バス一台をチャーターし、車中で「福澤諭吉と上州・信州についての資料」を配布し、高速道路で群馬県富岡市に到着。「富岡製糸場」見学。長野県境に向けて、海拔一〇〇

メートルの「神津牧場」まで国道を登坂。神津邦太郎氏創業の牧場を見学、昼食。午後、分水嶺をこえて長野県佐久市に降り、同市志賀の神津秀章邸を訪問。「福澤諭吉書簡集」未収のものを含む福澤諭吉からの書簡等、貴重な史料多数を見学。夕刻同邸辞去。新幹線佐久平駅を経由、浅間山麓を通過、「ホテル軽井沢1130」(群馬県吾妻郡嬭恋村)に一泊。この日は終日雨。

第二日(十月二十八日)

前日とは打って変わった快晴。雪をかぶった美しい浅間山の眺望をホテルより楽しむ。鬼押出、白糸の滝を観光し、軽井沢町に入り、外国人墓地(福澤が招聘したドロップパス教授の夫人の墓、ショー記念礼拝堂(宣教師アレキサンダー・ショーは三年間福澤邸内に居住))をそれぞれ見学。万平ホテルで昼食後、旧道經由横川に出て高速道路で帰京。六

時半、新丸ビル脇で解散。

以下、今回の訪問先と福澤諭吉との関係について、のべることといたします。

II 上州・信州と福澤諭吉

(1) 富岡製糸場

① 明治政府の殖産興業政策

「富岡製糸場」は明治の初年、繭から生糸をつくる製糸の「模範工場」「伝習工場」として政府がフランス人十数名を招いて開設した官営工場でした。建築設計・機械設備・作業方式のすべてがヨーロッパ式の新鋭工場でした。

幕末の開港とともに、欧米の商人は横浜の居留地に店を構え、欧米の品物を日本に売り込むとともに、日本の産品を買い付けて欧米に送っていました。彼等が日本で買い付けた主要品目は、何といても「生糸」と「蚕卵紙（蚕の卵を貼り付けた種子紙）」でした。それは、当時ヨーロッパで蚕が伝染病に汚染されてほとんど全滅し、生糸・絹織物の生産が激減したため、生糸の代替供給地として、中国と日本、ことに日本が重要視されていたからでした。ところが当時の日本の養蚕技術・生糸生産方法は、まだまだ幼稚

で品質・規格も一定せず、また日本側の売込商人のなかにはいかかわしい悪徳商人が多く、これでは「日本の生糸」に対する国際的評価が下がる一方で、国策上放置できないというので、明治政府は重要輸出品目である「生糸」の製造の近代化に乗り出しました。すなわち、大蔵少輔伊藤博文・租税正淡沢栄一が指揮をとり、ポール・ブリーユナ(Paul Brunat)ほか十数名のフランス人を高給で迎え入れ、養蚕地帯である上州(群馬県)の富岡を選び、準備に着手し明治五年十月「富岡製糸場」が竣工して操業を開始しました。初期の従業員(工女といっていました)は近隣の上州・信州から集まったようです。そして、翌年の明治六年六月には、まだ鉄道も開通していない時代なのに皇后陛下(のちの昭憲皇太后、皇太后陛下がおそろいでわざわざ「富岡製糸場」に行啓され、工女の作業を天覧されています。それほど政府は富岡製糸場を重要な産業施設として位置づけていたようです。

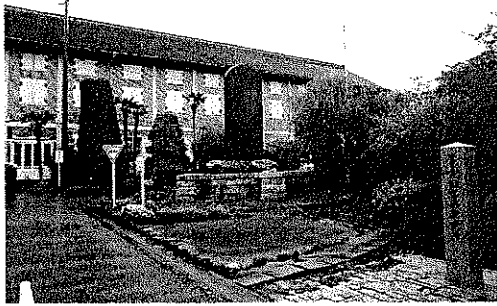
富岡製糸場は「伝習工場」でしたから、関東、東北だけでなく、政府は各県各村によびかけて、全国的に工女を募集しました。操業開始前の明治五年五月付で「勸業寮」から出された「諭告書」には、富岡製糸場設立の趣旨を詳し

くのべ「此ノ製糸場ニ於テ女職人四百人余御雇入レ相成リ、製糸ノ法ヲ学バセラルベキニ、工女ハ外国人ニ生血ヲ取ラルナドト妄言ヲ唱ヘ、人ヲ威シ候者モコレアル由、以テノ外ノ事ニ候」
「妄言ニ迷ヒ候テ御趣旨ニモトリ候様ノ義コレナキ様致スベク……」と躍起になっています。なぜ「生血を吸う」などというデマが飛んだのか、一説によると、富岡に外国人がやってきたというので、土地の人が外国人宿舎をのぞいて見ると、毎日赤いワインをグラスに注いで飲んでいる。それを「生血を吸っている」と誤解したとのこと。

② 中津からの「工女」派遣と福澤

福澤諭吉の旧藩である、九州中津でも養蚕が奨励されていました。富岡製糸場開設から八年後の明治十三年(一八八〇)、二十五名の女子が、中津から富岡へ三年間の期限で実習に送り込まれました。福澤はその往復とも、東京でこの工女達の世話をしています。中津には当時「末広会社」という授産会社があり、その会社の世話で二十五人(一名を除き、いずれも士族の娘)が東京経由で富岡に向かいました。福澤は、中津の山口広江宛書簡(明治十三年十一月

四日付)のなかで「上州の製糸執行の為、女子供二十五名、本月九日中津乗船の由、当地に着の上は相成るべきだけ、世話致し候積りにて、昨今宿処等も手当いたし、先づ本塾の内にある万来舎とて一棟これあり、この舎に落付き候様相談定まり……」と書いています。また十一月二十日付の福見常白宛書簡には「富岡行の工女一同、無事一昨十八日着京、弊邸中の一屋に止宿、昨日は芳蓮院様へお目見え……」と書いています。芳蓮院様は旧藩主奥平家のご隠



旧富岡製糸場跡

居様です(当時福澤邸内に寓居)。

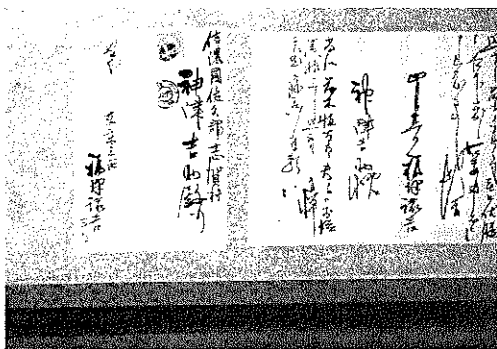
それから三年後の明治十六年十二月九日、福澤は上野から熊谷まで汽車で日帰り旅行をしています。同行者のなかには時事新報記者の高橋義雄、同津田興二もいました。その時の模様を在米中の子息達に報じた書簡のなかで福澤は「中津士族の娘共二十四、五名、三年前上州富岡製糸場へ参候処、成業。此のたび帰京いたし、昨今当邸逗留、不日中津へ帰り申すべく、何れも糸の事には巧者に相成り候由也」と記しています。

福澤は富岡製糸場を訪問したことはありませんでしたが、明治二十六年(一八九三)、官営富岡製糸場が三井家に払い下げられたとき、民営初代所長になったのは熊谷旅行に同行した、中津出身の津田興二でした。そして明治三十年には藤原銀次郎が二代目所長となりました。

なお、富岡製糸場は、そののち三井の手を離れ、横浜の原富太郎(原合名)の経営に移されたが、昭和十五年片倉工業富岡工場となり、昭和六十年代まで操業がつづけられました。そののち平成十七年富岡市が寄贈を受け、現在は見学施設として観光客に公開されています。

まだ年齢も二十歳未満であるから、もう数年、勉強をつづけたらどうか、「格別の優秀」の御両人であるから「二十五、六歳までは、余念なく研究して真実有用の人物にいたし度き小生の志願、この度の試験に付き欣喜の余り、態と一書を呈し候。」

結局、両人は卒業後一度郷里に帰ったようですが、その年の十二月二十四日付田中米作宛の書簡のなかで、福澤は「神津・茂木二氏も両三月前より帰塾、文書勉強致し居り



神津吉助宛福澤書簡(部分)

(2) 神津牧場

① 塾中の上流 神津国助・茂木吉治

信州北佐久郡志賀村(現長野県佐久市志賀)の神津家は、戦国時代から代々この地域の豪族豪農として連綿と続いた名家です。

明治の新時代に入ると、神津家では時勢を察して家政を整え、とりわけ一門の子弟の新教育に力を注ぎ、優秀な青年を次々に東京に留学させ、早くも明治七年三月には、当主神津九郎兵衛吉助は弟国助ならびに姉婿茂木恒太郎の子茂木吉治の二人を福澤諭吉の慶應義塾に入學させています。この二人は四年後の明治十一年四月、優秀な成績で義塾を卒業しました。福澤はこの二人に大きな期待を寄せたとみえ、四月二十一日付神津吉助宛書簡のなかで、次のようにのべています。

「未だ拜顔を得ず候えども、一書拝呈……」と書き出し「陳ぶれば、令弟国助君並に茂木吉治君御事、年来弊塾へ御寄宿、格別の勉強、今日に在りては塾中の上流、誠に他生徒の hands とも相成るべき次第……」、「必竟天稟の才とは申しながら、御幼少の時より御教訓行きとどかせられ候実効と感服の至りに候」と賞讃し、今回「卒業ではあるが、

候」と記しています。田中米作は越後の出身で、神津・茂木と同年入学同年卒業の人です。

神津克己氏が編纂された貴重な文書「福澤諭吉から神津一族にあてた書翰集」に収められた神津文雄氏の一文によりますと、「神津国助(一八五九―一九二二)は神津家の三男で、分家して『中の新宅』を名乗った。明治七年、慶應義塾に入學し、十一年には全科をおさめて卒業したが福澤の懇望により、なおとどまってお塾で窮理・経済・算学を修め、また、英語学を修行して十三年帰村した。」「国助の兄吉助は、佐久地方きつての大地主で、大規模農家の運営には、国助の手腕を期待していたにちがいない。国助もそれを心得て、帰村して吉助を助けたのであろう。」「国助は帰郷の翌年、村の同志とはかつて育英社を結成するなど、教育に熱心であった。」

国助に宛てた福澤書簡は数多く残されています。いずれも情味あふれるものです。なお、神津国助は大正十年、当時流行したスペイン風邪にかかり、郷里志賀村でなくなっています。年は六十二歳でした。

② 神津牧場の創設者 神津邦太郎

福澤は神津家の当主吉助と深く交わるようになり、神津家の財産運営や、一族間の争いなどの調停などにまで相談にあずかるようになりました。

そのうちに、ちよと茂木吉治、神津国助の帰京と入れ替るように、吉助の長男神津邦太郎（一八六六―一九三〇）が明治十四年、慶應義塾に入學しました。「慶應義塾入社帳」には「神津邦太郎」「長野県信濃国北佐久郡志賀村百八十九番地 吉助長男」「慶應元年十月生」「入社年月 明治十四年十二月」「保證人 神津吉助」と記入されています。邦太郎は、どういう事情があったのか、慶應を中退して上海に渡航し、外国租界のなかにある「セント・ジョージズ・カレッジ（聖ヨハネ学院）」に学び、上海在住の欧米人の生活・活動を視察したといわれています（慶應義塾の卒業生名簿には明治四十三年特選と記されています）。

この神津邦太郎が「神津牧場」の創設者です。邦太郎はこの牧場で乳牛を飼育し、牛乳だけでなくバターバターの製造に成功し、「神津バター」として世に送り出しました。福澤論吉は、「神津バター」を愛好し、知人にも吹聴していたことは有名です。邦太郎は、晩年は東京に居住し、昭和五

年十二月二日、心臓発作で急逝しました。享年六十五歳でした。

③ 神津邦太郎の抱負

神津邦太郎は、上海で見聞をひろめたあと、郷里に帰りましたが、やがて牧場経営に乗り出しました。彼自身が著した「物見山神津牧場沿革記」（『明治農書全集』第八巻所収、ここでの引用は『神津牧場百年史』によるものです）により



神津牧場

ますと「余（邦太郎）は、生来いたって動物を好む。明治十六、七年のころ牧畜業に関する欧米のありさまはいかにと、あるいは見聞に、あるいは書籍に、種々講究の結果、蓄牛の最も有利にして旧来の耕耘と合併、営業するの必要を發覚し、明治二十年に至り、ついに欧米の酪農法にならぬ、蓄牛により肥料を得るとともに乳汁を搾取してこれをバターに製造し、その売価をもって収益を計り、また子牛の育成を完全にし蓄牛の繁殖改良を計り、耕・牧ならび行なう、いわゆる牧牛酪農の事業を……」と大抱負をのべています。

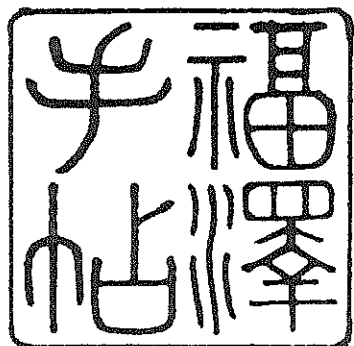
邦太郎は、まず洋種雌牛・雌犢雌犢三十六頭を購入し、牧場用地として郷里志賀村から志賀川をさかのぼって信州・上州の分水嶺をこえた「群馬県北甘楽郡西牧村大字南野牧字物見」の官有地四八七町歩を借用し、明治二十年十二月に開牧しています。これが現在の「神津牧場」の所在地です。

（以下次号につづく）

（福澤論吉協合理事長 はっとり れいじろう）



第42回福澤史跡見学会 神津家邸宅にて



136

福澤諭吉協会
2008年3月

福澤手帖
136
平成20年3月20日

〒
108-0073

東京都港区三田2丁目14番5フロイントウ三田五〇七 (社) 福澤諭吉協会
電話 〇三(三四五四)一九八五 yukichi@axel.ocn.ne.jp
制作 慶應義塾大学出版会 印刷製本 三和印刷



『世界国尽』の挿図 (タンジール)

ISSN-0912-6082

上州・信州の旅(下)

—— 神津牧場、志賀神津邸、軽井沢 ——

服部禮次郎

I 今回の旅行のあらまし

II 上州・信州と福澤諭吉

(1) 富岡製糸場

① 明治政府の殖産興業政策

② 中津からの「工女」派遣と福澤

(2) 神津牧場

① 塾中の上流 神津国助・茂木吉治

② 神津牧場の創設者 神津邦太郎

③ 神津邦太郎の抱負(以上前号掲載)

④ 神津バターと福澤(以下本号掲載)

(3) 福澤諭吉の信州旅行

(4) 軽井沢外国人墓地に眠るドロップバス教授夫人

(5) 軽井沢の恩人 宣教師シヨウと福澤諭吉

III むすび

④ 神津バターと福澤

神津邦太郎の宣言どおり、神津牧場では開業の翌々年、バターの製造をはじめました。

明治二十四年七月二十五日付、神津国助宛書簡のなかで、福澤は「……兼ねて願ひ置き候バタ御遣し下され有り難く存じ奉り候。はたまた、広告の義は尋常一様廣告文に記すの外に、およそ此のバタの産する土地の状況より牧場の由来等、其の大概を雑報に掲げたらば妙ならんと存じ候えは、其の草稿の一通り短文にても御遣し成され度きことに候」と書いています。

明治二十六年三月十四日付の国助宛書簡では、福澤は「……五、六日前箱根へ遊び、ちよつと山口仙之助方(註 富士屋ホテル)へ立寄候ところ」「神津バタの義頼りに賞讃致し居り候……」と記し、牛乳の保存法について助言し

ています。

明治二十八年四月十四日付の同じく国助宛福澤書簡では「毎度バタを有り難く存じ奉り候。老生こと、近来は頗るバタを好み毎日一度は是非とも用いずしては叶わざる事に相成り候処。内外諸品の内、ただ神津バタの一種のみ口に適し他は一切役に立たず……」と記し「憚りながら邦太郎君へも、よろしく御礼願ひ奉り候」と結んでいます。

明治二十八年十二月十五日付神津邦太郎宛福澤書簡では、「……御手製のバタ毎々御送り致し下され誠に有り難く、内外唯一品、その右に出ずるものなし」「……過般も申し上げ候通り老生義如何なる訳にやバタを嘗める習慣をなして、之を用いざれば腹合よろしからず然るに他の品は一切口腹に適わず、唯信州の神津バタあるのみ……」と礼をのべています。

明治二十九年三月十日付神津邦太郎宛福澤書簡では、「毎々御心頭に掛けられ御手製のバタ誠に有り難く……」「毎朝いただき御陰を以って老骨を潤し候」、同年秋の邦太郎宛礼状では「……今回も精品二(缶)到来」「野外散歩、唯今帰宅、焼パンに付けていただき候処に御座候」とあります。

さらに、明治三十年四月三日付国助宛福澤書簡では、福

澤は神津バタは老生のため、いまや必要欠くべからざるものとなったが、これまで随時ご惠与にあずかっているのはまことに心苦しい。どうぞ代金を請求して欲しい「此の事は邦太郎君へと存じ候えども、直接に申し上げ候は余り殺風景かつ失敬と存じて、わざと仁兄まで御相談致し候義に御座候……」とのべ「老夫が気の済まぬと申す処も御推察願ひ奉り候……」と遠慮勝ちに懇請しています。

さて、邦太郎は、郷里に帰ってから「牧場経営」だけに専心していたわけではありませんでした。明治二十一年に結婚し、明治二十五年には志賀村の村会議員、明治二十七年には株式会社佐久銀行取締役、同年佐久郡の郡会議員、明治三十二年には志賀村の村長に就任するなど郷里の名望家として広く活動しています。しかし何といつても、神津牧場の充実発展が邦太郎の念願でした。明治三十八年三月、邦太郎は優良乳牛導入のため叔父国助の長男秀弥を伴ってアメリカに渡り、相当な資金を投じてジャージー種の乳牛四十五頭と、牧牛犬コリー数頭を購入して帰国しました。そしてそれまで神津牧場で飼育していた雑品種の牛はすべて売却し、茶色のジャージー種の牛に統一しました。

そののち、「神津牧場」の経営は神津邦太郎家から田中銀之助氏の手に渡り、さらに明治製菓等の手を経て、現在は「財団法人神津牧場」によって立派に経営され、多くの観光客を集めています。そして経営主は変わっても、「神津牧場」の名称は変わらず、黒ぶちの「ホルシュタイン種」の乳牛飼育が日本中で流行しているなかで「神津牧場」の栄養価の高い牛乳、乳製品はジャージー種の乳牛から生まれています。なお、神津牧場の入口の近くの芝生には昭和六十二年に建てられた「神津牧場開設百周年記念碑」とならんで高田博厚制作の「神津邦太郎翁」の胸像が台座の上に据えられています。

(3) 福澤諭吉の信州旅行

福澤諭吉は神津一族のひとびとと広く深く交わりを結びながら、「信州北佐久郡志賀村」の神津家を訪れたことは一べんもありませんでした。また、あれほど神津バタ、神津バタと騒ぎながら「神津牧場」を訪れたこともありませんでした。当時の交通事情では、東京から神津牧場を訪問するのは至難のことだったでしょう。しかし、明治二十九年、福澤が家族をつれて長野の善光寺詣りをした時に、福

に造られた土蔵もそのままの姿です。並木和一宛福澤書簡には「……陳ぶれば、過般漫遊中は計らずも御約介罷り成り、種々御心入れの優待を被り感謝に堪えず、一切万事珍しきことのみ、畢生の記念に御座候」と礼をのべています。神津国助宛の礼状には「長野なり野沢なり諸彦のご優待、実に感謝にたえず」尚以って御令兄様(吉助)始め邦太郎君其外皆々様へよろしく御礼願ひ奉り候」とのべています。神津家は、明治・大正・昭和・平成を通じて繁栄をつづけられ、現在も毎年八月一日には御一族各家のかたがたが多数集まられて墓参そのほかの行事を営んで居られます。また、福澤諭吉およびその家族から送られた書簡その他貴重な品々も、この家でそれぞれ丁寧に保存して居られます。

(4) 軽井沢外国人墓地に眠るドロップス教授夫人

明治二十三年、慶應義塾に法学部を開設するにあたって、福澤は、文学科、理財科、法律科それぞれの主任教員をアメリカから招きました。そしてハーバード大学エリオット総長からの推薦で三人が着任しましたが、そのうち理財科主任教員として経済学全般の教授にあたったのがギヤレット・ドロップスでした。熱心に塾生を指導して評判

澤はまず、十一月六日、長野停車場の駅頭で神津国助、茂木吉次らの出迎えを受けて再会を喜び合いました。翌七日、「城山館」の歓迎宴には、神津邦太郎が発起人として参加しています。さらに一日おいて十一月九日、福澤は佐久地方有志の懇請を受け、小諸駅から、人力車を列ねて三里の道を南佐久郡野沢村に向い、宿舎となる同地の豪農並木一の邸宅に入り、小憩ののち隣地の「城山館」で演説のあと、そのまま宴会に臨みました。神津国助が開会の趣旨を演説し、福澤もあらためて一場の談話を試みました。この歓迎宴の出席者百二十名のうちに、神津姓の人が八人見られます。「神津九郎兵衛(吉助)、神津雄太郎、神津松太、神津国助、神津善之助、神津豊助、神津藤平、神津順策」です。ほかに茂木吉次らの名も見えます。そしてその翌日十一月十日の朝、福澤一行を御代田停車場まで見送った七人のなかに、神津国助、神津善之助も入っています。

帰京後、福澤は、宿舎となった並木家の主人並木和一ならびに神津国助に礼状を出しています。並木家では現在のご当主並木徳夫氏がこの福澤の礼状を巻物に仕立てて大切に保存し、また福澤をもてなした座敷、福澤の寝所となった座敷も、当時そのままの姿が守られています。天明年間



ドロップス夫人墓碑前にて

もよかったのですが、明治二十九年夏、夫人同伴で軽井沢に避暑中、夫人が赤痢に感染し、八月十七日に逝去しました。慶應からは、大学の教場取締役武田勇二郎が弔問のため軽井沢に駆けつけますが、福澤は武田に書簡を送りつぎのようにのべています。

「明日は軽井沢へ御出のよし、御苦勞に存じ奉り候。ト
ロップス氏御逢の節は、老生を始め家族皆々より、弔詞く
れぐれも御致意願ひ奉り候。夫人の病中唯一度の見舞さえ
致さず、又送葬に会することも得ず、遺憾此のことに御座
候。いづれ同氏帰京の上、万々語り申すべく候えども、一
応の弔意を呈し度く、よろしく御含、然るべく御伝達下さ
れ度く願ひ奉り候……」

そののち、ドロップスは亡くなった夫人の妹さんと再
婚しましたが、慶應大学部との九年間の契約が満期となっ
て明治三十一年、三十九歳のとき帰国しました。

それから二十八年経った大正十五年十月、ドロップス
は慶應大学部の教え子であった池田成彬らの世話で再来日
しました。そのとき、夫妻は軽井沢のドロップス夫人の
墓に詣でています。当時ドロップスはすでに健康を害し
ていましたが、帰国後ほどなく逝去したそうです。

(5) 軽井沢の恩人 宣教師シヨールと福澤諭吉

信州軽井沢は、江戸時代には中山道の宿場として、北国
大名の参勤交代の道中、あるいは皇女和宮わのみの関東ご降嫁
のみちすじにあたったので、それなりに栄えていました

たのがキッカケで、福澤諭吉とシヨールは交わりを結ぶよう
になり、福澤は三田山上の邸内の西洋館にシヨールを住まわ
せるようになりました。それは三年間の契約だったそうで
す。三年後にシヨールは飯倉に教会をつくりそこに移ります
が、そののちも終生福澤一家と親しくしていました。

シヨールたちがはじめて軽井沢に来たころは、日本人は
「軽井沢に避暑」などということは全く考えていませんで
した。せいぜい海岸に出かけて海水浴、あるいは湯治場へ
出かけて保養という時代でした。ところが京浜地区に住む
欧米人は高温多湿のベタベタする酷暑に耐え切れず、早く
から、神奈川県の大山、房総半島の鹿野山、日光、箱根な
どを避暑地としていましたが、たまたま、東京から横川ま
で汽車が通じたので、和美峠・中山峠・碓氷峠などを越え
て、軽井沢にたどりついた外国人旅行者によって避暑地軽
井沢が「発見」されたのでしょうか。

さて、シヨールは避暑地としての軽井沢が気に入り、簡素
な別荘をつくりました。外国人別荘第一号といわれていま
す。シヨールと同じころに軽井沢を避暑地として「発見」し
た外国人に東京大学のお雇い外人ジェームス・ディクソン
という英国人が居ましたが、この人は、明治二十五年に日

が、明治になってからは、さびれた寒村になっていきまし
た。ところが、明治十九年ごろから、東京・横浜地域に住
む外国人が軽井沢に避暑に来るようになりました。まだそ
の頃は、碓氷トンネルが開通する以前ですから、上野から
横川まで汽車で来て、そこからは碓氷峠を徒歩で越えたの
でしょう。その初期の外国人避暑客のひとり、英国人宣
教師のアレキサンダー・クロフト・シヨールでした。

シヨールの家系はスコットランド系の英国人ですが曾祖父
の代からアメリカ大陸に移住し、シヨール自身はカナダで生
まれ、英国聖公会の聖職者になり、ロンドン近郊の教会に
移って修行をつづけていましたが、たまたまイギリスの海
外キリスト教布教団（福音伝道協会）から派遣されて明治六
年、宣教師として日本に着任しました。日本では、そのこ
ろようやく、日本人に対するキリスト教の布教が公に認め
られたころでした。シヨールは、英国公使館の人たちから、
宣教師として布教に従事しようとするなら外国人居留地な
どに住まず、日本人と同様に市中に住むようにとの忠告を
受け、伝手をもとめて、三田の慶應義塾に近い「大松寺」
という浄土宗の寺に寄宿することとなりました。そこへ、
福澤の子供たちがやってきて、シヨールから英語を習い始め

本を去ってアメリカへ行つてしまいました。シヨールのほう
は、明治三十五年東京で亡くなるまで、日本に居て、毎夏
のように軽井沢に来ていたので、「軽井沢の草分け」「軽井
沢の恩父」として、讃えられるようになりました。

いま、軽井沢旧道の「シヨールハウス」、「シヨール記念礼拝
堂」の前庭には、シヨールが没した翌年に建てられた「シ
ヨール記念之碑」が残っています。その文面は漢文で書い
てありますが読み下せばつぎのとおりです。

「氏ハ英国ノ名士ナリ。久シク本邦ニ在ツテ、布教ニ従
事ス。始メテ我が軽井沢ヲ以テ避暑地トナセルハ実ニ氏ト
為ス。氏ノ遺沢ヲ慕ツテ此ノ碑ヲ建ツル者ハ村民ナリ。明
治癸卯夏」

英文のほうには、

「サマー レジデント（夏期滞在者）として軽井沢住民と
ともに住んだ最初の人であり、そして長年にわたり住民た
ち（インハビタンツ）の誠実な友人（フエスフルフレンド）
であった、アーチディーコン・シヨール師を記念して」

という意味のことが記されています。アーチディーコンと
いうのは「大執事」などと訳されていますが、聖公会の布
教地区責任者に与えられる称号のようなものでしょう。

ショーは、福澤が没した翌年の三月十三日、五十六歳で亡くなっていますが、その葬列には、福澤の長男・次男が花輪を捧げて先頭を歩いています。

III むすび

今回の旅行では、神津家のみなさまから格別のご配慮をいただきました。福澤論吉の時代の神津家宗家ご当主は「神津吉助」氏でした。吉助氏には弟さんが何人か居られますが、弟豊助氏の家は「上の新宅」と呼ばれ、その下の妹竹司さん（慎吉氏夫人）の家は「前の新宅」、末弟の国助氏は家は「中の新宅」と呼ばれました。国助氏の長男で、後に宗家の当主となる邦太郎氏が神津牧場の創始者です。

今回お世話になりましたのは（順不同）、前の新宅のご曾孫 克己さん、上の新宅のご曾孫 卓雄さん、中の新宅のご曾孫 秀章さん、宗家のご当主 信一さん（神津邦太郎氏の妹さん＝神津浜司さん、「東の新宅」の曾孫で、宗家を継がれました）のかたがたでした。神津克己さんは、多年にわたって綿密に考証編纂された「福澤論吉から神津一族にあつた書翰集 改訂版」を参加者各自に一冊ずつ贈呈いただき、また富岡製糸場、神津牧場、神津家を取材したビデオ

テープを持参され、バスに設置された受像機で、走行中一同、その映像を鑑賞し、予備知識を得ることができました。

神津卓雄さんは協会会員で、数年前から協会と神津一家との連絡にあたってくださり、今回も終始、旅行の運営にご協力いただきました。また、神津秀章さんご夫妻には、多人数の私たちを温かく邸内にお招き入れました。季節の品をご馳走になり、由緒あるお座敷のなかで、長時間、貴重な福澤資料を数多く拝見させていただきました。神津信一さんにはご宗家ご当主として、わざわざ当日、東京から佐久へお越しになり、神津秀章邸で、ご一族を代表して、私どもに丁寧なご挨拶をいただきました。

ここに神津家ご一統のみなさまに敬意を表し、ご一門のご繁栄をお祈り申し上げます。

【後記】今回の旅行日程の企画・事前の現地調査、旅行会社（JTB日本橋支社）との交渉、関係方面との連絡、配布資料の作成を担当した鶴浦総務委員は、出発時の見送り、解散時の出迎えに当っておりましたが、所用のため旅行には参加されず残念でした。なお、会員の旅行参加費用は、お一人約四万円でした。

（福澤論吉協合理事長 はっとり れいじろう）